

## 令和6年度 第1回さいたま市スポーツ振興審議会会議録

1 日時 令和7年1月21日（火）14時00分から16時45分

2 場所 さいたま市役所議会棟第7委員会室

3 出席者

(1) 委員（12名）

安藤 梢（オンライン）、小川 智一、佐藤 正伸、武田 健太郎、武田 弓佳、  
野津 美智代、坂東 千里、兵藤 明子、堀越 悠、牧野 奈津子、森 士、吉川 洋一  
（敬称略）

(2) 事務局（9名）

清水市長、鶴田スポーツ文化局長、石塚スポーツ部長、  
大熊参事兼スポーツ政策室長、細渕スポーツ振興課長、折茂スポーツイベント課長  
（スポーツ政策室）池田室長補佐、島村主査、羽島主査

4 欠席者

(1) 委員（1名）

上林 功（敬称略）

5 傍聴人 0名

6 公開又は非公開の別 公開

7 問い合わせ先

さいたま市 スポーツ文化局 スポーツ部 スポーツ政策室  
TEL 048-829-1737

8 内容

(1) 開会

委員13名中12名の出席により、会議が成立した。  
（安藤委員はオンライン参加）

(2) 委員等紹介

司会より、委員及び事務局職員を紹介した。

(3) 会長等選出

委員の互選により、会長に佐藤委員、副会長に上林委員と決定した。

(4) 諮問

さいたま市スポーツ振興審議会会長あてに諮問を行った。

(5) 議題

事務局より、議題(1)第2期さいたま市スポーツ振興まちづくり計画の見直しについて、資料に沿って説明した。(説明に対する質疑なし)

(佐藤会長)

まずは、事業の見直し等に関する意見について、小川委員より座席順にご発言いただき、追加の意見があれば挙手でお願いします。

(小川委員)

さいたま市として、来年度、東京で開催されるデフリンピックを支える取組がないと思いました。デフリンピックは「ろう者のオリンピック」です。オリンピック・パラリンピックと違ってメジャーではないですが、4年に1度開かれていて、来年度は東京で初めて開かれます。さいたま市は東京に隣接しているので、障害者など立場の弱い人に参加を促すようなスポーツ振興があれば良いと思います。

基本方針2は、サッカーやバスケットなどがあるので充実していると思いますが、基本方針1の「まなぶ」「ささえる」という分野で、障害者や立場の弱い人、子ども達や貧困層へのスポーツ振興の取組ができないかと思いました。お金持ちはサッカークールに通ったりできますし、習い事は親が連れていくので、親がどれだけ時間をかけられるかによって差が出ます。親が時間をかけられないご家庭の子どもは、スポーツが疎かになっていきますので、そういった取組があれば良いと思います。

最後に、スポーツとの連携ですが、さいたま市にある<sup>いかづち</sup>雷部屋という相撲部屋との連携はないのかなと思いました。

(武田(健)委員)

スポーツの傷害医療をしている上で最近気付いたことをお話をさせていただきます。小中学生の身体は、基本的に成長して変わっていきます。成長する時は骨が先に伸びて、後で筋肉がついていきますが、多くの傷害は、筋肉の伸びがついていかずに体が硬くなったり、筋肉に無理な負担がかかることで、肉離れや腱鞘炎などが起こりや

すくなったり、体の使い方が悪くなって疲労骨折が起こったりします。そこが1番大きいと思います。運動器検診は問診票を書いて引かかるようなら診る程度ですが、もう少し重点的にできたら良いと思います。

また、小学校中学年から中学生くらいまでの子ども達が、自分の状態を自分で知っておくことは非常に大切で、患者さんや親御さんにお話するとよく分かってもらえます。冊子や、講演させていただくことで「今、ここは無理がかかっている」「休めばこれくらいなら大丈夫かもしれない」というマインドがついてくれると良いと思っており、そういうシステムづくりができるとスポーツ行政として、体を守る立場として良いと思います。

次に指導者です。小学生はまだ圧倒的に体が弱いので大事にされる指導者が多いですが、中学くらいになると無理をさせる指導者が多いです。「柔道の先生に正座できなかつたら連帯責任で全員追加3分と言われる」というようなことがまだまだあるので、指導者の方に実際にコンタクトを取れる場があると良いと思います。当院のスポーツ医学総合センターでも出前講座を受けていますが、指導者側の講習も必要だと思います。教員の方々も忙しいのは分かりますが、ちょっとした知識を入れるだけでも違います。スポーツ能力の測定会などに関して今感じていることの1つです。

また、成人の週1回以上のスポーツ実施率を見て、肌感としては70%もしているのかなと感じました。70%で計画を達成したなら、その質を上げることに取り組んでも良いのではないのでしょうか。

あとは個人的な意見ですが、私はバスケットボールを昔からやっていて、さいたまブロンコスも応援していますので、もう少し練習場所などを支援してあげられたら良いなと思います。

(武田(弓)委員)

普段、練習等で小学校を使って活動していますが、借りられるのは週に1~2回です。私のチームは高齢者が多いため、日にちを空けて活動するよりも常に少しずつでも動ける方が適していると考えています。そのために、いろいろなところに声を掛けて練習させていただいています。

さいたま市内の小学校は冷暖房がなく、冬はとても寒い中で、また夏はとても暑い中で練習するため、冬は足を攣るなどの怪我をする方が多いです。さいたま市近隣の他の学校は、1時間100円等お金はかかりますが冷暖房が入ります。そこで、さいたま市の小中学校の体育館に冷暖房設備を入れる計画があるのかお伺いしたいです。

また、令和8年度に埼玉県でねりんピックがありますが、それに対してさいたま市として考えていること等はあるのかをお聞きしたいと思っております。

(事務局)

ご質問にお答えします。教育委員会で小中学校の体育館の空調を整備しているところで、中学校から始めて、ゆくゆくは小学校へという計画だと聞いております。現在、中学校体育館で空調機が整備されているところは、学校体育施設の開放で使っていただいています。団体さんも空調を使えるようプリペイドカードを販売して空調機を動かせるように既に実施しているところもございます。1時間100円というのはかなり格安で、さいたま市はそこまで安くはないですが、いずれ空調機が整備されましたら有料で開放団体にも利用していただけるように考えております。

ねりんピックは、福祉局の高齢福祉課が所管することになっております。これから市内の調整等が始まっていくと思いますが、その中で、さいたま市で行う競技等が決まっていますので、競技への支援や開催準備を進めていくと聞いております。

(野津委員)

小学校体育連盟の事業もスポーツ振興まちづくり計画と重なってやっているところがあるので、ぜひ知っていただきたいところもあります。

まず小学校体育連盟は、「生涯にわたって運動好きな児童の育成」を目指して活動しており、2つ大きな柱があります。1つ目の柱は授業の指導方法の工夫改善、もう1つの柱は体育行事の充実です。行事については、今までオールさいたまになる前は、それぞれの市の行事がありましたが、さいたま市になったことで、協議を重ねた上で昨年度、2つの新しい事業を始めております。

1つは親善バスケットボール大会です。これは中学校区で一緒になる小学生同士が親善を深めるという意味で、6年生がどちらかの学校に集まってやっており、プロスポーツチームとの連携として、さいたまブロンコスさんとの連携を進めております。2~3校が集まって戦っているところに選手が来校してパフォーマンスをしたり、子ども達が質問をしたり、大会に向けて激励の言葉をくれたりしています。プロの選手が目の前でダンクシュートをしたりするのを見て、子ども達にはとても刺激になっています。ブロンコスの広報によると、取組以来、駒場体育館に行く小学生の数が非常に増えたそうで、こうした取組はスポーツ振興まちづくり計画の「する」「みる」にも繋がってくると思います。今後は小学校体育連盟でもこういうことを広めながら、小学校としても、子ども達ができるだけ市の施策に参加できるような形で協力できないかと感じました。

もう1つの行事は校内サッカー大会です。「サッカーのまち」ということもあり、各校内で学級対抗もしくはクラスの授業の最後にトーナメントという形で必ずサッカー大会を行っており、大会前にはレッズさんとアルディージャさんの選手からの応援動画を子ども達に流す取組をしています。ハートフルスクール等いろいろな事業もあるのですが、プロスポーツチームとの連携については、小学校の施策に絡めて

推進できたら良いと思いました。

体験活動について、本校では体力テストの結果が市平均よりも低い結果となっています。街中という環境もあるかもしれませんが、子ども達の様子を見ていると遊具など幼児期からの体験が足りていないのではないかと思います。「布団干し」という鉄棒に脱力してぶら下がることができない子がクラスに2~3人はいます。登り棒も上まで登ることができず、自分の体を支えられません。鉄棒に膝をかける「コウモリ」も、逆さになるのが怖くてできない子が非常に目立ちます。公園の立地や遊具数によりますが、都市部では放課後にそういう体験活動が少ないことを危惧しております。

資料18 ページ(3)の小5の週1以上スポーツ実施率の目標は93%で、令和5年は83.4%です。これも、帰ってから遊ぶ場所がなく、なかなか体験する機会がないためと感じており、そういうところが課題だと思います。

もう1つ、中学校では小学校から上がってきた時に体力や体験の不足を感じているかと思いますが、小学校でも幼稚園や保育園から上がってきた時に体の使い方ができていないケースが非常に多いと思います。幼児期の子どもにとって親と一緒に遊ぶことは非常に大きな経験で、親子で体験するのはプラスです。幼稚園や保育園の子が1人で公園に行き行って遊ぶことはできませんが、親と何回かでもそういう体験をしていれば、運動が好きになったり恐怖を取り除いたりすることに繋がると思います。親子での体力テストとか、そういう活動がとても有効であると感じています。

(坂東委員)

野津委員がおっしゃったことに本当に共感します。ボール遊びができる公園が増えると良いと思います。中学生もボール投げが本当に低くて、肘が上がらない、投げるフォームが全くできていないところから教えなければいけないので。

中学校の体育連盟なので生涯スポーツに繋げる基礎づくりに大変責任を感じていますが、課題としてお話しておきたいのは大会の運営です。中学校の教員は、昔は部活をやりたくてなっていたのですが、現在は働き方改革とかブラックとか言われている通りで、大分気持ちが離れている教員が多いです。そういった中で、学校総合体育大会、新人体育大会と、さいたま市では駅伝大会があります。子ども達の多くが、これを目標に頑張っています。もちろんエンジョイしたい子もいますが、本校約550人のうち80%が運動部、10%が文化部、10%が未加入で、外部でサッカー、野球、ダンス等を学んでいます。その中で、まず施設がとにかく足りません。学校は1週間の大会期間という特別日課を設けますが、施設が足りないので悪戦苦闘です。教員が、本当に夜中まで教育委員会や施設との調整をしています。練習するために市外の施設を借りたりもしますが、可能であれば中学生は減免等の連携ができるとありがたいです。大会中には、柔道や陸上など種目によって救護員も必要ですが足りません。お願いしても高齢化で断られてしまって、赤十字と連携を試みたり悪戦苦闘してい

ます。

アクセスも大変で、「中学生がバスを乗っ取っている」など必ず苦情の電話が来ます。マナー等の事前指導はするのですが、顧問の駐車場もないですし、みんなで例年我慢し合ってやっています。部活の地域移行が叫ばれているので、こういった大会も正直苦しい状況です。先日、神戸市が「部活は 2026 年からやらない」と宣言して、どんな体制づくりをするのか教員達は情報にアンテナを高くしています。

中体連としては受益者負担を今年から始めていて、大会に出る人は保護者から 100 円をいただいています。熱中症対策にもかなり力を入れ、そのお金を使わせてもらっていて、これからも会計を公にしながらか適正に運用していきます。

指導者は不足し、専門でない教員が顧問をやっていて、保護者からのクレームなどを受けて対応しています。子ども達には温度差があるのでバランスを見ながら指導を続けている状況です。教育委員会からも、部活動指導員としていろいろなサポートをいただいております、連携しながら調整して行わせていただいております。

あとは、学校施設の開放もあります。本校もグラウンドは少年団のサッカー、大人のソフトボール、野球などで毎日全日埋まっています。体育館も全部埋まっています。学校施設はどんどん使った方が良くと思うのですが、管理の問題として、生徒の出入りがある倉庫など、キリがないほどあります。信頼関係で「ここは入らないでください」と言って開放させてもらっていますが、何かあるとリーダーに連絡して対応をお願いするのも教員の仕事となっています。グラウンドが広いので夜間照明を 10 年以上前から使っていて、通勤の際に明るくて良いと地域の方にも好評です。役に立って良かったと思っています。

本校は、陸上部が土曜チャレンジスクールというのをされていて、中学生がかけっこや鬼ごっこを小学生に教えて遊ぶという連携もさせていただいております。

このように、資料にあるようなことは網羅している気がします。先ほどのデフリンピックの話も、福祉課が校長会にポスターを持ってきてくださったので、ポスターを廊下に貼ってお知らせしています。職員も初めて知ったとのことで、学校を通してアピールしてもらえると助かります。学校もやることはたくさんあるので、啓発としてお知らせする分には協力できると思えました。

もし可能なら、さいたま市の人口当たりの施設数がわかると良いです。以前、研修で、日本は圧倒的に人口に対して施設が少ないと聞きましたし、カナダなど海外では身近に施設があって理想的だと感じました。

また、学校には栄養士と養護教諭がおり、夏には熱中症の講義をしています。コラボ授業として、栄養士の先生に大会や練習に関する栄養関係の授業をしてもらったり、整形外科の先生に来てもらって、柔軟性や姿勢づくりに関するお話をしてもらったこともあります。そうした連携をしながら情報をいただけると、ありがたいと思っています。

(兵藤委員)

スポーツ少年団の指導者は一応資格があるのですが、2019年までは持っていない人も指導でき、一度資格を取れば永年資格のような状況でした。しかし、2020年からは必ず公認スポーツ指導者の資格を持っていないと指導者として登録できなくなりました。週末にスタートコーチの講習をしていたのですが、例えば、10歳前後では神経系は伸びるけれども身体成長はまだ先なのでそんなに筋肉が付かないといったことも講習の中に取り入れて、コーディネーションのトレーニング等も非常に重要だという具体例を挙げたりしています。

日本スポーツ少年団では3歳から登録ができることになっております。幼児の頃から運動遊びを通して神経系を伸ばしていく、飽きさせずに遊びを取り入れて体をしっかりと作っていくというACP(アクティブチャイルドプログラム)というのが日本スポーツ協会のホームページ等に出ているのでご覧いただければと思います。日本の伝承遊びみたいなものも載っていて、誰でもできるけれどもやってみると難しいものを遊びの中に取り入れて、神経を刺激していきます。そういったものをすぐ取り入れるようにしています。

指導者の資格を取ったら、4年ごとに研修を受けて更新していかなければいけません。もちろん資格取得にお金もかかるので、指導者数が減っていますが、質を高めて社会から認められる指導をしていくために、スポーツ少年団は活動しています。

さいたま市はスポーツ少年団に登録している13種目それぞれに指導者がいますが、中学の部活動も自分達のところから卒業したお子さんが行くので、中学校の部活動に関わって、そちらの外部指導に入っている方もいらっしゃいます。

1つ気になるのは、中学校の外部指導者の資格についてです。以前お尋ねしたところ、特に資格は持っていないでもお願いしていると聞きましたが、今もそうなのでしょうか。どんな競技でも専門の資格を持って指導することが必要だと思います。中学校の部活動では専門外でも顧問をされている先生がいらっしゃることは周知の事実ですが、そうした方々は、競技性が高くなってくると非常に悩むとよく聞きます。私は、サポートする方がその競技の資格を持っていないのは良くないと思いますので、どういったレベルの方が外部から入っておられるのかご回答いただければと思っております。

それから、ちょうど中間年で見直しの時期ということですが、間にコロナが入ってしまって、私ども少年団も2020年から活動ができずに大変な思いをしてきました。団員数も減りましたし、登録しなくなったお子さんも多いです。2020年からスポーツが非常に凹んでしまった部分があると思いますが、資料の令和5年度のまちづくり計画の達成度を見ると、ほぼ達成できている内容が多かったので、しっかり盛り返してスポーツが盛んになっていっているのかなとも思えました。この計画がずっと遂行されて、益々スポーツが盛んになってくれると良いと思います。

私はサッカーのまちづくり計画委員もさせていただいています。さいたま市はサッカーがどうしても中心になるのは仕方ないですが、1つのスポーツに特化しなくてもいろいろなスポーツでいろいろな方を巻き込んで、スポーツでまちを明るくすることも不可能ではないし、これが進んでいってくると良いと思います。

(坂東委員)

(中学校の外部指導者の資格について) 確実ではないですが、資格等はないと思います。ご自身が部活で大学までやっていて全国大会に出たなどの実績がある方々が、好きで、近くだからという理由で教えてくださっているところが多いと思います。ただ、やり過ぎないとか、言葉の使い方だとか最初に必ず研修を受けて、指導者としてのスキルを学んでから学校に来てくださいます。あとは、顧問の先生と打ち合わせをしながら。実績ができれば2年、3年、5年という形で長くやっていただいているのが実情です。

(佐藤会長)

自分の領域なので補足します。教員養成の教職課程の中でも、特別活動という単位が2単位あるだけで、「課外活動」と呼ばれるように部活動はその中に入っておりません。教員免許の発行のための教職課程の中でも、部活動の指導に関する講義は正式には組み込まれていないのが実態です。旧日本体育協会、現日本スポーツ協会の外部資格を、並行して独自に勉強なさっている先生方が多いのが現状となります。

(堀越委員)

資料をみると、基本方針の1、2、3で「まなぶ」「ささえる」、「する」「みる」、「成長」がありますが、「まなぶ」「ささえる」と「成長」に関しては、こちらの委員会参加者及び各施設の方々にフォローアップできる部分だと思います。しかし、「する」「みる」に関しては、市民自らが能動的にやらなければ右肩上がりの目標の実現は難しいところだと思っております。

18ページの進捗状況(6)のスポーツ観戦を含む年間来訪者数では、令和元年から令和5年の途中段階の数字が下がっています。当然コロナ禍の影響はあると思いますが、目標の3000万人が遠い数字に思えます。「する」に至るまでに、まず「みる」ことで刺激を受けてスポーツに携わっていく意識を持っていただくのが間口として良いと思いますので「みる」という観点が特に重要だと思いました。

周りから聞いた内容ですが、子育てをする中で運動のハードルは高いようで、それよりも、目の前の娯楽、スマートフォンに手を伸ばしてしまうお子さんが非常に多い印象です。子どもにスマートフォンを渡せば黙ってくれるところも現状あるかと思えますし、運動にいきなりシフトできない、志向が合わないという子ども達が「する」

ところまで至れるように、スマートフォンを利用した広告および市の魅力を伝えていく動線が作れば良いかなと思いました。

私はeスポーツに2000年初頭に関わっておりました。プレーヤーとしてやっていたこともあるのですが、非常に黎明期で、広告も付きませんし、国内にプロゲーマーもいない時代だったので冷えた市場でした。今はプロゲーマーさんが非常に多くいます。先日、所沢でプロゲーマーさんを招致してイベントを開催して、市民やファンと触れ合ったり、物販もして非常に宣伝効果になっていたようです。いわゆるインドア層も含めた窓口として、スマートフォン等を介して広告を打って、市として上手く導入できないかと考えました。実際にみて、このまちは魅力的だということでインドアからアウトドアにシフトする方もいますし、インドアでそのままeスポーツをしていただいても構わないと思います。それで、より一層スポーツの活性化ができれば、あとは市のフォローアップで支えていけるかなと考えました。

(牧野委員)

スポーツと一言で言うと、子ども達には垣根が高いです。私は子ども達とスポーツ教室で触れ合います。普段は小学生の走る姿はあまり見かけません。走るのが苦手だからスポーツはやりたくない、体を動かすのは私には無理だと、決めつけている子ども達がほとんどです。先ほどおっしゃっていたように、幼児期からの体験が少ないからだと思います。昔は、子どもは外遊びをしていました。私は、子ども達に「身体を動かすこと(スポーツ)は楽しい」と思って欲しいと思います。学校での朝礼が終わったら鬼ごっこをすとか、突拍子がないと思えても遊びの中から、「走るのが楽しい、身体を動かすのが楽しい」と感じてくれるかもしれません。

土曜チャレンジスクールで教えているメンバーがいますが、走り方を教えると運動会が楽しみになったり、ボールの投げ方を知らなかった子がボールを遠くに飛ばすやり方を知ると楽しそうです。中学生が、投げたり遊んだりしてあげると子ども達の目の色が変わります。競技性のあるものだけがスポーツだと思っている方も多いですが、これらも全部スポーツです。

親御さんには怪我しないだろうかと心配する方も確かにいると思います。しかし、私達がスポーツ教室を開催すると、小学生の友達同士、祖父母とお孫さん、高齢のご夫婦など参加も様々です。そこで遊びながら自分のペースで競技と思わず楽しく参加しています。

ニュースポーツは競技性が高くはないですが、それでも競技スポーツです。例えばボッチャやモルックは、芸能人がテレビでやっているのをみて参加したいという市民が多いです。小学校の体育館でボッチャやモルックをやると2~3面しか取れませんが30人~40人位で競いながらとても面白いと楽しくプレイしてくれます。

ボッチャやモルックは競技中、頭の中で計算し攻略を考えていくスポーツなので、

「やってみたら時間を忘れるくらい楽しかった」と言ってくれます。人間は身体を動かすことが大前提ですが、楽しみながらそれができないという課題があります。地域によっては公園がない、学校も4時くらいで帰るため、家でテレビやパソコンやゲームをしています。休みの日に教室を開くので遊びに来て身体を動かしてくれますが、スポーツという名前の垣根が高すぎて二の足を踏んで参加を見合わせてしまう人もいます。

学校やPTA等で「無料で教えに行きますよ」とお話するのですが、認知度がないせいか思うように集まりません。ただ、見沼区ではPTAが参加したことで教職員も参加して成功した事例もあります。スポーツは良いコミュニケーションが取れるので、一人になることもなく、人の好きを知り、助け合い、仲間意識や連帯意識も持てると思います。

また、中学校に出前講座に行きましたが、小学校でスポーツがトラウマになった子ども達が「中学でスポーツは無理だと思っていたけれど、これならできる」と言ってポッチャに夢中になりました。

大人は20代から60代までの方が通勤通学をしています。それ以外あまり身体を動かしません。そこで思うのは、ラジオ体操を始めたかどうかということです。他県では仕事の前に皆でラジオ体操をするそうです。真剣にやると結構身体が動きまわります。小学生は夏休みに朝のラジオ体操をやっていますが、やり方を知らない子も多くて驚きました。行政より企業に声を掛けて、会社や職場などでもやれると良いと思います。ラジオ体操の音楽は、今はスマートフォンで流せるので手軽に出来ます。ラジオ体操で体をほぐしてから仕事をするのは脳にも良いと思いますし、そういうことから推奨してスポーツ人口を増やしていければと思います。

高齢者の方に関して、私は百歳体操のインストラクターをしています。男女問わず80代中心にたくさんの方々が来られます。皆さん、元気でいたいから、またお友達と会いたいから参加し、スポーツだと思わず自分のために来ています。

最後に、いろいろな年代を通して言えることは、スポーツは楽しく身体を動かすことができ、日常生活の中に取り込めます。また、コミュニケーションも取れて、職場や環境も明るくなり、自分の健康維持もできます。そういうことを、皆で声を出して推奨していければ良いと思います。

別件ですが、私達スポーツ推進委員は自分の仕事の上に、活動しています。さいたま市のスポーツ推進委員になると、埼玉県スポーツ推進委員協議会、各区スポーツ振興会、各地区体育振興会等、いろいろな団体に所属しなければなりません。ここで伺いたいのですが、旧浦和と旧大宮を同じ体制にはできないのでしょうか。浦和にはないのに大宮には残っているものがあるのが疑問です。

(森委員)

さいたま市は、もともと浦和レッズや大宮アルディージャなどのサッカーを核としたまちづくりをしています。Jリーグが発足して、地域密着をコンセプトに掲げた活動を始めた証なのだと思います。そう考えると、野球というスポーツはプロ野球が存続して非常に人気で、今は海外でも大谷君の活躍もあり「みる」スポーツとして非常に人口が増えている気がしますが、「する」スポーツとしての野球人口は激減してしまっています。そのあたりは、活動や運営をしてきた方の傲りだったのではないかと感じています。

加えて、高校野球は甲子園の全国大会を毎試合 NHK が放映してくれる中で人気があって、同じスポーツをやっている高体連と高野連が違う組織で固執してしまっているように、野球界は分断されている部分が多々あります。人気の中でやってきていたのが、小中学生になかなか浸透されなくなって、企業努力が足りていないと強く感じています。

今、野球界から飛び出してスポーツクラブを立ち上げながら活動していますが、そういう課題に直面しながらどうしていかなければいけないのか。私達が小さい頃のように空き地や原っぱがなく、公園の中でも球技が禁止されています。特に野球ボールが飛んできたら生命の危機にも発展しますので、そういう面では野球がなかなか受け入れられない時代になってきてしまっています。しかし、それではいけないということで活動を進めていて、この3年ほど、地元の美園エリアの野田小学校で小学5～6年生を対象に投げ方教室を開催しています。浦和学院の野球部の生徒達が指導したりして、1時間くらいなのに激変します。そのくらい、今は投げる力が記録的にも落ちています。

高野連の話をする、中学生に指導するのはスカウトの一環になってしまうため、要望を出す必要がある、なかなかカテゴリーが下のコースに指導できません。そのあたりは本当にスポーツ全体のことを考えているのか課題だと感じますが、小学生に対しては、実は申請を出せばすぐにできます。投げ方教室以外にも、去年は美園小学校、一昨年は美園北小学校で、さいたまスポーツコミッションさんと協力しながら、野球、バスケット、サッカー、そろばんや英会話、けん玉教室、山田先生の肩肘検診など、総合的な活動イベントを行い、非常に多くの生徒や子ども達が集まってくれました。今は近場でやっているこういうものを、できればさいたま市の中で広げてやらせていただくようなことを計画の中に入れていただければ、活動は十分やれると思います。

うちのスポーツクラブでは、子ども達だけでなく指導者育成も行っています。サッカーやバスケットの指導者はライセンス制で指導力を求められる試験になっています。しかし、野球界はそれがありません。そういう面で、野球の指導に長けたレジェンドの方々に研修をしながら指導者を育成したいと思っています。医療スタッフに

も入ってもらって、机上の空論にならないように、どういう形でやると怪我に繋がってしまうのかも学ぶ取組をしています。野球界では少し現場に近い高校の世代なので、普及のためにできることがあれば追加でさせていただけるとありがたいです。

私が監督をしていたときには、オフシーズンに障害者の方々の野球教室をしました。非常に盛んですし、障害を持っている方は健常者との交流をしたいと思っています。その当時のエースが投げる 135km くらいのボールの打席前に行くのをとても喜んでくれました。このような交流を図ることは、野球部の子達にとっても非常に勉強になりました。触れ合いもありますし、高校時代からイベントの場で指導者の役割をすると、その後成長していったとき指導する立場をやりたがるので育成にも繋がっていきます。そういう世代も入れてもらうような企画を足していただけると良いと思いました。

(吉川委員)

2点お話ししたいと思います。1つは、今、森委員が言われた障害者スポーツについてです。私は障害者福祉に携わる時間が長かったので、障害者スポーツの振興に少し寄与してきました。障害者スポーツをするときに何が1番困るかというところ、ボランティアさんで、障害者支援をしながら大会に行かなければいけないところが1番の悩みの種でした。なぜなら、障害といっても身体障害、知的障害等いろいろあります。身体障害の中でも、肢体不自由、目の不自由などがあります。そうすると、ボランティアさんにたくさん来ていただいても、車いすを押したことがない、手話ができないなどの理由でなかなか担い手がおらず、大会運営も二の足を踏んでしまうということがありました。障害者スポーツの振興はもちろん、基本方針の中でスポーツボランティアの充実というところがあります。私としては、障害特性に絡むところで障害者の理解を促進できるようなボランティアの育成を何とかできないかと常々思っていたので、そういったところを計画で踏まえられればと感じました。

もう1点は、気候変動に伴う暑さへの対応をどのように計画に盛り込んでいけるのかという点です。気候変動によって気温上昇は続いていきますが、ソフトテニスの大会でも、去年は救急車を呼ぶか否かの判断を迫られる場面が非常に多く、大会に看護師をあらかじめお願いしたりしていました。気温の高い中でスポーツをする場合、日本ソフトテニス連盟では「コート上で35度を超えた場合その場で休憩に入る」というルールを作ったのですが、現場では、35度というのはもう少し何とかならないのかと感じるところがありました。こうした課題は、これから避けて通れないと思っています。私からはこの2点です。

(安藤委員)

まず、女性スポーツという観点から女子サッカーを取り上げさせていただきたい

と思います。さいたま市には、トップリーグに参加する2つのクラブがあります。また、多くの女子サッカー選手が世界のビッグクラブに羽ばたいています。サッカーだけではないですが、そういったトップアスリートをロールモデルとしながら、女性スポーツや子ども達のスポーツの発展にもっと寄与していくことができるのではないかと考えています。

それからヨーロッパでは、女子サッカーが非常に成長していて人気が出ています。政府が中心となってジェンダー平等の施策が進んでおり、男女平等の労働環境を整える動きなどが進んでいます。そうした動きと比べると、日本の女性スポーツはすごく後れを取っているのが現状です。さいたま市には、サッカーに関してはトップクラブが2つ存在し、他のトップレベルの女性スポーツが存在していますので、市が中心となって女性のトップスポーツを盛り上げていくことで、市民全体のスポーツに関するジェンダーギャップの意識を変えていけるのではないかと期待しています。

浦和レッズレディースは昨年リーグ優勝し、アジアでも優勝しました。その際、決勝戦は駒場スタジアムで行われ、今年もこれからアジア優勝をかけて準々決勝に臨みます。そこで優勝して、アジアで優勝すると、世界のクラブ一位を決めるクラブワールドカップというものもあります。そういったアジアや世界を代表する試合で、さいたま市の浦和駒場スタジアムが使用されています。しかし、正直申し上げてスタジアムの老朽化が問題と感じています。日本中、また世界の人達がスタジアムに足を運んだときに、スポーツやさいたま市を存分に味わってもらえるようなスタジアムに改善していく必要があると考えています。最近では、長崎で新しいスタジアムが作られ、トレーニングジム、商業施設、宿泊施設、スーパー銭湯、サウナなども一体となっていて、そこからまちづくりがとても盛り上がっています。サッカーのまち、さいたま市がスタジアムを中心としてまちづくりをしていくことで、サッカーだけではなく市全体のスポーツの発展に大きく繋がっていくのではないかと考えています。

私自身、スポーツを「まなぶ」という点について、非常に共感しています。運動の効果は、運動だけではなく、運動後の食事、睡眠、休養が一体となることで大きく上がります。今は SNS や YouTube 等でいろいろなトレーニング動画や運動に関する情報が上げられていますが、間違った情報が非常に多いと感じており、間違ったトレーニングを行っていくと怪我などにも繋がる危険性があります。専門家からの身体にとって正しい情報をしっかり市が伝えていくことがとても重要ではないかと考えています。トップアスリートが行っているトレーニングやコンディショニング管理の知見は、子どもから高齢者まで、スポーツをする人達にも十分活かせるところがたくさんあると思っています。ぜひ私自身もこれから貢献させていただければと考えています。

(佐藤会長)

私も一員として少し意見を申し上げさせてもらいながら、いただいた意見をまとめます。

やはりスポーツ振興の基本である指導者、人の問題についてです。その数の問題、質の向上、資格といったところがありました。市でカバーできる部分と、スポーツ協会等に頼らなければならない部分がありますが、そういったところでの事業づくり、指導者の質の向上、連携の向上といったところが出てきたと思います。

施設という点もありました。既存施設改修の意見が安藤委員からありましたが、学校には冷暖房という声もありました。学校の施設を活用するというのも申し上げたと思います。

そしてスポーツに結びつけるためには、プログラムやイベントが必要です。ここが皆様、様々なご意見があったところだと思います。ここは、今日出てきた多様な意見から、まさにイベント事業に対する示唆を上手く抽出していただければと思っています。

感想のようになりますが、「スポーツと運動」というキーワードがとても気になりました。冒頭に事務局からご説明がありましたが、2ページ目にある「本計画におけるスポーツの範囲」をかなり広く捉えるということで、軽度な運動から導入していくとやる人が増えるのではないかという声が多かったと思います。スポーツとして制度化されたものを否定するわけではありませんが、誰もがチームになってパフォーマンスを求める訳ではなくて、気楽な運動も見落としてはいけないと思います。

そして、学校の機能がやはり話題になっていたかと思います。とりわけ各学校間でもやりますが、校種を超えた連携というところでしょうか。高校生が小学生を、というのが面白いと思いました。小・中・高の連続で考えられていますが、幼・小・中・高というような学校の連携の中で、その子達が将来市民になり、市の中で大人向けに用意されている事業に参加するという意味では、例えば高齢者と児童生徒の交流というのはまだない感じがしています。共生社会イコールそれではないですが、年齢を超えて、また健常者と障害者が共通の言語として使えるのがスポーツであると思います。まさに言語が違ってもルールが同じで、外国から来た方との交流の道具としてもスポーツが使えると思っています。

出てきた意見の中から、事業にぜひ拾っていただきたいと思っています。

(事務局)

本日欠席されている上林委員から事前に事業等の見直しについてご意見をいただいているので、ご紹介します。

各事業の実態があるかと思いますが、特に取組実績が予定通り実施できなかった事業の中で、今後の実施見込みがつかないものについて重点的に検討を進める考え

が必要ではないかということでございます。実施できなかった理由を基に事業を分類すると、いくつかの課題に分けられるということで、上林委員に4つほど課題の整理をしていただいております。

1つ目が、子育て・教育についてです。子育て環境や育成支援などに課題が生じているものです。2つ目は、参加者や参画事業者を集めることやその連携に課題がある事業です。3つ目は、広報や振興という点で、広報活動を周知またはそれらを実際に参加に結びつけることに課題のある事業です。最後に、環境整備で、スポーツ実施環境の不足や天候変化などへの対応に課題を持っている事業です。

この中で、子育て環境や参加者・参画事業者を集めることへの課題、スポーツ実施環境の不足や天候変化への課題に関しては、例えば「さいたまスポーツシューレの活用推進」といった事業などの中にそういった取組を包含させることで、事業としては残しつつ、既存事業を伸び代と考える方策があるのではないかとということです。ただ単にスクラップをさせるということではなくて、事業の統合化を含めた検討をしていくのはどうかというご意見をいただきました。

次に、追加で調査すべき事項への意見として、国内の動きについて3点ほど共有しますということでございます。

1つ目が、日本スポーツ協会による取組です。日本スポーツ協会が地域スポーツ推進の要として、これまで別組織としていたスポーツ少年団と総合型地域スポーツクラブ事業の統合を進めています。これは連携ではなく統合です。全く新しい地域スポーツ連携促進のための体制が検討されているというところです。これは新たな体制ができるまで動きようがないところではあるかもしれませんが、スポーツシューレなどの環境整備を先に進めておく考えがあるのではないかとということで、追加事項としてのご提案をいただいております。

2つ目は、スポーツ施設の整備改修とあわせたエリアマネジメントを活用した広域型のスポーツコンプレックスの検討で、スポーツ庁が進めているものです。今現在、エリアマネジメントによる公共空間利用を含めた改訂版スタジアムアリーナ改革ガイドブックというものの作成が進められています。同時に、マネジメントを生かしたスポーツ施設間連携をより強固にしたスポーツコンプレックスが議論されており、市が進めているクリテリウムのような公共空間のスポーツ利用について推進されていく方向性が示されています。そういったことで、追加の調査としてはどうかということです。

最後は、ユーティリティトークンを使用したスポーツで流通できるポイント通貨の発行と運用です。愛知県などが取り組んでいる内容です。こちらはデジタル地域通貨など、トークン発行をうまく活用して、特定のエリアやスポーツコンテンツ内で循環させるWeb3の仕組みの試行が始まっています。愛知県では、地域の商店街とアリーナを繋ぐ実証実験に着手している他、スポーツボランティアへのポイント付与、地

域部活動移行への活用など、様々なアイデアが出されています。さいたま市民のアプリを活用して、アプリを通じたサービス提供や「さいコイン」、「たまポン」などの既存のトークンの仕組みを上手く使えば、比較的簡易に同様の取組を始められる可能性があるのではないかとことです。

こちらの共有事項ですが、これは事業として予定をされているもの、ないしは実行中のものが含まれているので、厳密な調査をした上で検討を進めることが肝要ではないかとご意見いただきました。

(佐藤会長)

他に、追加で調査すべき事項について、ご意見のある方は挙手をお願いします。

(小川委員)

子ども目線でもいいのですが、祖父母や親を含めた家族と一緒にスポーツに取り組んだ率が示せば良いと思います。スポーツには垣根があるというのもそうですが、子どもは身近な人がやっているか、親がやっているかが非常に大きいです。親がサッカーをずっと好きで応援していれば子どももサッカーやるとか、私の子どもは私がアメフト好きなのでアメフトを頑張っています。

私はアメフト部を私立の中学校と高校で作りました。中学校では全然広まっていなかったのですが、中学校の教員になり、クラスの15名を部員に入れて成り立たせている感じです。このように、大人の誰かがやっていると子どももやる、というのは結構大きく、家族で同じスポーツをしていると子どももやるのかなと思います。

私が入っているアメフトチームはシニアチームですが、中学校のルールと高齢者のルールが一緒で、トップチームのルールは違うというようなケースがあります。小・中・高とか中・高での連携や社会人とトッププロから次の青年層に教えるという発想はありますが、トッププロは上手過ぎるので、レベル的に同じなのが実は小中学生と40歳以上のシニア層だったりします。天皇杯ではないですが、そのような連携を上手く取って大会をしたら良いかと思います。祖父母を含めて同じようなスポーツをしている率みたいのものがあると良いかと思います。

また、ボッチャやアメフトのようなマイナースポーツは、野球と違って普及をしなければいけません。ボッチャと似たようなスポーツで、高齢者の方がしているディスコンというスポーツがあります。ノーマライゼーションの考えに則った障害者スポーツなので、教えてくれる講座では、普及のために非常に丁寧に教えてくれます。私もその日1日でとても良いスポーツだと思いました。そういう機会を子どもやスポーツをしていない人が持つだけで、本当に普及していくと思います。何も行動を起こさないと、垣根はあると思いますが、スポーツをするように引っ張る人、そういう機会があるか否かで全然違うと思います。スポーツを普及させたいところはたくさん

あると思うので、そういうところと上手に連携すればスポーツはどんどん進行していくと思います。

まとめると、1点は家族とスポーツをする割合、もう1点はスポーツ講座等への参加割合が測れると良いと思います。

(安藤委員)

私のようにスポーツが大好きな人は市のいろんな取組に誘われますが、スポーツ嫌いの子ども達やスポーツ無関心層の人達のスポーツ実施率を測り、上昇させていくのが大切だと思います。

(6) その他  
なし

(7) 閉会